

## 2016年度 中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	教授
氏名	水上 雅晴		
NAME	MIZUKAMI Masaharu		

## 1. 研究課題

（和文）江戸時代における考証的学問の発展に関する基礎的研究

（英文）Preliminary research on the development of philological study during the Edo era

## 2. 研究期間

2年間

## 3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

（和文）

江戸時代における実証重視の学風の形成と展開を跡づけることを目指して本研究計画を構想した。研究項目として、（1）考証に関わる文章・記述を渉猟して分類整理、（2）分類整理されたデータを分析して、考証学的な知識の伝播・影響の状況を明らかにすること、の二つを立て、資料収集・調査および考察を進めてきた。

（1）に関しては、江戸時代に書かれた言語・文字・史実・制度・器物・天文・地理などに関わる考証的な文章の採集と整理を実施したが、当初の見通しが甘く、想定していたよりはるかに多くの文章が残っていることが判明したため、事項索引の編纂は途中で諦めざるを得なくなったのが反省材料である。

（2）に関しては、学術シンポジウムにおいて、国内に大量に残されている年号資料に収録されている儒家文献の考証的な議論を紹介し、その学術的価値を論じた論考を発表した。その論考は後日刊行される論文集に収録されることが決定している。

江戸時代において、骨トに関わる知識は江戸後期の国学者である伴信友（1773-1846）『正ト考』（『群書類従』所収）によって集大成されたと言えるが、そこに至るまで学問的考証の営為がどのように継承され、発展したかを論じる研究論文を準備中である。

（英文）

Though philological study was suddenly and highly developed in Japan during the modern period, few scholars have paid attention to the process of its development. This research project focused it, and through two year's survey and examination, conditions of the process were partly demonstrated.